

聖心女子大学 一般選抜対策講座

(二〇二〇年 駿台予備学校 今井 愛子)

A 出題傾向

国語常識・現代文(小説＋評論)・古文の四題構成

①知識問題

「一」で、漢字の書き取りと読みの問題が出題される。

「二」「四」の現代文の読解問題では、選択肢に四字熟語や慣用表現が含まれることもあり、語彙力が必須。

「三」では文学史も問われる。

○語彙のレベルは標準的なものが多いため、なるべく得点したい。語彙力は大学受験という枠を超えて日本語話者として必須のもので、受験を機に養いたい。

○文学史に関しても出題は基本的な作品名を選ぶという出題なので、『国語便覧』で著者の顔・名前・作品をセットで覚えたい。

②読解問題

a 本文 字数……二〇〇字前後～四〇〇字前後と、設問により幅がある。小説と、評論または随筆。

テーマ…思想・メディア・社会・文化など 受験生にとって比較的取り組みやすいテーマが多い。

難易度…標準

b 設問 オースドックスな設問が中心。選択式と二〇字～四〇字程度の記述式を併用。

語句の知識、傍線部の内容説明、傍線部の理由説明、空欄補充、内容合致など多岐に渡る。

B 対策

a 読む力

文章の長さによつては、あまり時間に余裕が無い場合もあるかもしれないが、しっかり文章に向き合つてその内容を読み取ることが求められる。

過去問を中心に様々な文章を読んで慣れる必要がある。

主旨を理解するだけでなく細かい読解も求められる。

読む力の差がそのまま得点に反映されると考えられるので、練習量をしっかりと積みたい。

b 解く力

設問は非常にオースドックスなものばかりなので、基本的な設問で失点をしないよう注意したい。

記述式問題もあるため、時間には余裕がないかもしれない。特に傍線部の内容説明や内容合致問題は、「a 読む力」によるところが大きいので、「いかに設問を解くか」という小手先の技術にとらわれるのではなく本文理解を優先すべき。

A②でも言及したとおり本文の長さが設問により異なるため、試験開始の合図と同時にまず「一」の漢字を短時間で解いた後、冊子全体に目をおし解けそうな問題から取り組もう。

C 具体的な練習方法

基本的には聖心女子大学の過去問を利用し、練習を積む。

まずは時間をはかり、設問を解く。その後答え合わせをする前に、もう一度じっくり本文を読み返し、答えを出してみる。その際、解答根拠を明確にしたい。その上で答え合わせをし、1度目と2度目の得点の差を含め本文を検討する。最後に、漢字や語句の意味など暗記すべき知識を確認する。

☆小説読解のポイント☆

ポイント①

小説は、固有性を読み取る。

- ・ 人物の固有性
- ・ 時の固有性
- ・ 場所の固有性

↓「人物」「時」「場所」を意味する表現が出てきたら、必ず印をつける。

ポイント②

小説では、場面ごとの理解が大事。

↓場面ごとに、人物たちの心情・動作を考える。

ポイント③

小説では、時間の推移を把握する。

↓時間を意味する表現は、必ずチェック。

↓時間が変われば人の気持ちも変化するので、「時間の変化に伴い、どのように気持ちが変わっているのか？」を考える必要がある。

ポイント④

小説では、人物の対比を考える。

↓おかれている立場や各自の心情を、対比でとらえる。

二 次の文章は、島木健作『一枚の油絵』の一節に手を加えたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

貧しい家の子供である「私」は、町の上層階級の子供が通う、師範学校（教員養成のための学校）の附属小学校が授業料無料であることを知って、転学した。成績は良く、今は級長を務めている。

首尾よく試験が受かって転学を許されると、私は今までにも増しておとなしい子になり、よく勉強した。新しい学校の子供達は、美しくて伶俐^{（注1）}だった。多くのことにおいて私は引け目を感じなければならなかった。私は勉強して彼等に勝つのほかはないのだった。学業成績の上で彼等を引き離して行くことは、思っただけで、心臓の血が一時に止まりまた激しく流れ出す、^A復讐にも似たような興奮だった。

——教室中がにわかにしーんとなった。靴音がして、先生方が入って来たのである。

生徒は私の号令で、起立し、一礼し、席についた。

受持ちの青木先生は、新学期の挨拶をし、二人の新しい「^{（注2）}教生先生」を皆に紹介した。師範学校の四年生である教生先生は、一学期毎に交代する。それがすむと、青木先生は、誰かを探すような眼で教室の一方を見て、「高山に桜田、こっちへ来て。」と云った。すぐに列のなかから男生徒と女生徒が一人ずつ出て、教壇の下の所に立った。先生は、新学期からの新しい友としてその二人を紹介し、「仲良くしてよく勉強するように」と繰り返して云った。

先生の話している間中、赤くなつて、うつむいて、もじもじしていた二人が、席へ戻つてからも、私達は激しい好奇心で彼等をじろろ見ていた。とくに私は強く注意を惹かれた。彼等の一人に私は本能的に競争者を感じた。私は教室内での私の特別な存在を彼等に知らしめたくてうずうずして、さつき号令をかけた時なども声がふるえそうだった。私が競争者を感じたのは、男生徒の高山武雄の方にだった。彼のような洋服の小学生というものはその頃はまだ珍しかった。彼が才はじけた少年であることは一目で知れた。それに私は、一週間ほど前の新聞で、新たにこの地に赴任した大学教授の高山氏について知っている。

一方女生徒の桜田は又、高山とは別な意味で、何という特別な存在であつたことだろう。高山と桜田とが並んで立つている間、私達はその異様な対照に思わず眼を見張らさせられた。彼女の風体は私よりもっとみじめだった。どんなに貧しくても私は袴をつけていたが、彼女にはなかった。^(注3)にこにこ紺の着物は垢で光っていた。脛がまる出しの着物は、なんぼ子供でも余りに短かすぎ、帯にはさんだ手拭いの白さだけがへんに新しかった。顔はでこぼこの感じで醜く、眼がやや釣り上つていた。全体が寒さにかじかんで、伸び切れずにいるというふうだった。彼女は戸まどいしたもののように、間違つた所に引き出されでもしたもののように、そこにそうして立つていた。

私は羞じて、自分の顔が赤くなつて行くのがわかつた。桜田はどうして転学して来たか？私自身の場合と同じ理由からであろうことを、私だけが感じたのである。

新人生の桜田は、それからしばらくの間、陰でいろんなことを云われねばならなかつた。第一に彼女の名前がおかしかつた。「桜田」という、美しいとも云える名字の下に続く名が、「もい」というのだった。桜田もい、ではなんとなく姓名として筋が通らぬと思われた。それに「子」をつけて、もい子、と呼んだならば一層おかしくはないか。すぐに腕白な連中が、肩と肩とを組んで、「もい子！もい子！」と怒鳴りながら彼女の前まで押して行つて、そこでわーッと叫んで逃げる、というようなことをやるようになった。

桜田はひとりぼっちで、無口だった。ふだんはそうおどおどしている風もなく、人を正面からじいつと見詰めるというような癖があつた。私は彼女を見る時いつも苛立たしさやもどかしさを感じた。またいじらしいような親しさと、憎らしさとを同時に感じた。それらは自分にも分からぬもやもやした妙な気持であつた。私は彼女の上に自分の半面を見ているのだった。その家の境遇から云うならば、私達は教室内での二人の異端者として特に目立っていた。——私の彼女に対するこの気持は、やがてもつと複雑なものに深まつて行かねばならなかつた。

新学期になつてから二度目の綴り方の時間だった。^(注4)前週、私達が書いた作品に対してその日は先生の講評がある。入つて来た先生の手に私達の作品の包みを見ると、私の胸はもう軽く躍つた。青木先生は綴り方には特別熱心な先生だった。そして私は綴り方と図画とが大好きであり、またよく出来る生徒とされていた。教室内での私の派手な存在は、主としてその事に依つてさえた。綴り方の時間に私の作品が皆の前で読まれ、図画の時間に私の作品が、後の壁のラシヤ紙の上に貼られる^(注5)ということは、これまで殆ど一度も外れつこなしのことだった。

先生はにこにしながら、今度のみんなの綴り方には非常にいい文があつたと云つた。それを読みましよう云つて、何枚も重ねてある一番上のを手にとつた。何時ものことながら私の胸は躍らずにはいなかった。今度の「冬の夜」という課題作文は、私には特に自信があつたから。

「もらい湯」と先生はまずその文の題を読んだ。

もらい湯？ もらい湯とは何だろう。私はまずその題に驚かされた。課題はたしかに冬の夜であつた。もらい湯などと云うのではなかつた。が、それは兎も角、最優秀作として読み上げられる作が、私のでないことだけは今や明らかだった。私の胸は忽ち今迄とは違つた高鳴りをして、顔がほてつて来た。しかし先生は委細かまわず読み進んで行つた。誰の作だろう？ 内容なんぞはどうでもよくて、私はただそれだけが知れたかつたが、先生はまた作者など誰でもいいと云つたふうに、いかにも惚れ惚れとした顔と声とで読んで行くのだった。もらい湯などと云つても何のことだか知らぬものが、この教室には多かつたことだろう。一日の労働を終えた百姓達の、冬の夜の、もらい湯の姿がそこには描かれていた。まこと、それは生けるが如くに描かれていた。暗い、凍るような夜、提灯を下げて、かなり離れている隣の家までもらい湯に行く。途中で提灯が消え、かじかむ手に

息を吹きかけながらマッチを擦る。その家へ行つて、さきに湯に入っている者の上るのを待ちながら休んでいる。湯につかつて、いい気持ちになつてゐる者と、外に待つ者との話声までが耳に聞えるようだ。「家へ帰つて見ると、肩にかけた手拭いが凍つてかたくなつていて、まるで棒鱈ぼうだちのようだった。」——その一句で先生はその文を読み終えた。それから、ゆつくりと、「これは、桜田もいさんの文です。」と云つた。

一瞬、全教室はあつと息を呑んだ。少くとも私にはそう思われた。何かしきりにほめ言葉を云つてゐる先生の声など、私の耳にはもう入らなかつた。しかし私の熱した頭には、今読み聞かされた文の世界が、眼に見えるような生き生きとした姿で残つてゐた。どんなに口惜しくても自分がこの文の作者に及ばないことを私は認めないわけにはいかなかつた。冬の夜、という課題に囚とらわれることなく、平氣でもらい湯とつけて、しかも誰よりもよく冬の夜の情景を生かしてゐる、その自在さに先ず

ア。私などは冬の夜と云われれば後生大事とどこまでも冬の夜で、寒念仏（注6）の声とか夜鳴きうどん（注7）の声とか、鼠ねずみが台所でガタリと云つたというような、せいぜい寒そうな材料を取り揃そろえる以外に能はないのだ。

私は桜田に対して、複雑な気持ちを持ち続けた。敵愾心てきがいしんを燃やしながらも、彼女に対して拍手を送らずにはいられぬ気持ちを始終経験した。彼女が何かで イ いいなどと考えたことは一度だつてなかつた。誰よりも私こそ彼女の仲良しになれる、またならねばならぬのだということを、感じていた。彼女を傷つけず、しかし私は彼女を追い抜きたかつたのだ。G 私は素直な、蟠たかまりのない氣持で、まっすぐ彼女の顔を見ることが出来なかつた。物心ついて初めて味わつた苦しみだった。

注1 伶俐——かしこいこと。

注2 教生——教育実習の学生。

注3 にこにこ紺——子供向けの木綿の生地。

注4 綴り方——作文。

注5 ラシャ紙——台紙、壁紙用の厚紙。

注6 寒念仏——寒中の早朝か夜間に、人々が集まって念仏を唱えること。

注7 夜鳴きうどん——夜間に出るうどんの屋台。

問八 ——部G「私は素直な蟠りのない氣持で、まっすぐ彼女の顔を見ることが出来なかつた」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から選びなさい。 8

- ① 桜田と仲良しにならないかと思つたが、恥ずかしくて何も言い出せないでいたから。
- ② 桜田とは理解し合えるはずだと思いながら、負けたくないと思つて張り合う氣持を持っていたから。
- ③ 桜田のことがこんなに氣になるのは、自分にとって初恋なのだという風に氣づいてしまつたから。
- ④ 桜田の悪口を言うようなことはしたくないと思ひながら、その優秀さに対して劣等感を持つたから。
- ⑤ 勝ちたいという強い競争心があることを隠しながら、桜田の優秀さを賞賛するふりをしていたから。